

まちに住む

道が介する人と家

Housing in the town

People and houses connected by roads

12023005

小原佳奈

主査 宮 晶子

准教授

副査 定行 まり子

教授

片山 伸也

准教授

高齢化・核家族化・共働きの一般化等により、育児・介護等が家族に与える負担は年々増加している。その結果が家庭内事故・事件として表出していると考えられる。この問題は誰しもが直面する可能性のあるものだが、実際には問題に直面してから行動・情報収集を開始する人が多い。この原因を住宅の閉鎖性と、施設が持つ利用者以外を寄せ付けられない特性であるとしたうえで、現在の「家に住まう」暮らし方から「まちに住まう」暮らし方を目指すにはどういった施設が、まちにどのくらいの距離感であるべきなのかを計画した上で、そのうちの敷地を実際に設計し、提案していく。

本研究では、文献調査・事例研究・地域調査を通してどのようにして現在の家が形成されてきたのか、家は各時代においてどのように定義づけられてきたのか、その共通点は何か。また、現在公共施設等を計画する際等に使われている「住居表示により分けられたまち」とは違い、地域に暮らす人が感じるようなもっと小さいまちを研究した上で設計を行う。

Keywords: *Town, Home, Family, Road, Opening a house*

まち, 住まい, 家族, 道, 家開き

1. 序論

1_1. 経緯

現代日本において、一つの住宅には一つの血縁・婚姻関係にある家族が住んでいることが大半で、子供や高齢者の介護・面倒を見ているのは同じ住宅に住む家族（多くの場合二親等以内）となっている。だが、核家族化はもちろんのこと、一世帯当たりの構成人数の減少や共働きの一般化により、年々家族・親族に係る責任が強く求められる傾向にあるように感じる。しかし、高齢化・核家族化・共働きの一般化普遍的なものになっている現状、核家族内だけで育児・介護を行うことは限界に達しており、その限界が家庭内事件・事故という形で表面化しているのではないかと思われる。

もう一つの課題として、育児・介護といういずれ自身が対処する可能性がある問題があったとして、その問題に前もって対策する人が少なく、いざ自身が問題に直面した時になって初めて問題に目を向け、行動を始めるということが「当たり前」となっていることがある。この課題は、特定の機能を持つ施設が、利用者以外を無意識に寄せ付けようとしにくい特性が関係していると思われる。

今では他の家庭に口を挟もうとすることは悪であるとされる風潮があるが、これまでの住宅・まちにおける歴史をさかのぼると必ずしもそうではないことが分かった。特に江戸時代後期においては通りから一つ裏に入った場所に存在する「裏長屋」があり、そこでは

血縁・婚姻関係外であっても当たり前のようにお互いに育児・介護を協力し合っていた。現在必要とされるのはこの相互扶助的な関わり合いだと考える。

1_2. 目的

住宅の変遷から、各時代でどのようにして「家」の定義をしてきたのかを調査する同時に、家を定義づけていた共通点を見つける。見つけ出した共通点を元に、「家に住む」ことから「まちに住む」住まい方へと変わる方法を研究する。また、人口等から導き出された、今の住居表示により分けられているまちの形を再考し、地域に住む人の視点から見た細かなまちの分かれ方を分析する。

「まちに住む」ために何が必要なのかを探ると同時に、現在多くの施設が持つ対象者以外を寄せ付けられない特性を薄め、まちに住む多くの属性を持つ人を知る「きっかけ」を得られる施設の設計を目指す。

1_3. 研究構成

本制作の構成をまとめる。第1章では研究の経緯、目的についてまとめる。第2章では文献調査を基に、住まいやまちの変遷をまとめる。また、調査結果をもとに家の定義の移り変わりや共通点等を考察し、今の住宅やまちに足りないものが何であるかを探る。第3章ではまちに住み続けるために必要な福祉介護サービスの中でも、地域密着型の福祉介護サービスについて事例調査やヒアリング等を

通してまとめる。第4章では提案する「まち」の調査を通して何が小さなまちのまとまりを作り出すのかを分析する。また、調査結果をもとに道の分類ごとの提案を行う。第5章では敷地選定と提案についてまとめる。

2. 住まいとまちの変遷

2.1. 住まいの変遷

制作を進めるうえで、現在の住まいやまちがどのような流れで今の形態を作り出してきたのかを文献を元に調査し、表1にまとめた。

表1からは、明治・大正時代あたりまでは相互扶助が重要視されていたということ。都市部における家の形は、現在とは違い屋根や壁を共有したような形態が一般的であったということが分かった。

2.2. 現代における住まいと外壁

反対に、現在の戸建て住宅は壁や屋根が他の住宅とは独立し、外とのつながりや情報を遮断している。きっかけとして考えられるのは、戦後復興に関わる住宅政策による、欧米式の住宅の大量供給である。日本におけるそれまでの住まいは、壁よりも移動可能な建具で空間を区切ることが多く、心もとない障子や襖といった建具であったとしてもその裏側をわざと覗くようなことをしないとという暗黙の了解があり、完全に閉ざされた空間はとても少なかった。そうした中で突然流れてきた、強固な外壁でもって視線や音を遮る住宅は当時の日本人からすると隣近所に必要以上に気を配らなくてもいいということでもって魅力的に映ったと思われる。

河野哲也氏の著書「境界の現象学 始原の海から流体の存在論へ」に次のような一文がある。

「家の境界、つまり『外壁』は自己を隠すことによって安全を確保しようとするのはもちろん、理想から離れた、不完全な状態である自分を外からの視線から逃すためであった」

この一文から、外部に対して住宅内の様子を必要以上に隠そうと

する要因には、これまでの隣近所との距離が近い住宅に対する反動があったことがわかる。

2.3. あわいの空間

明治時代・大正時代あたりまでは相互扶助が重視され、コミュニケーションをとる場が重要であったことが住まいの変遷からわかった。その空間は四面町の裏側（四面町の中央の広場の空間）や、裏長屋における井戸端、縁側といったものであった。

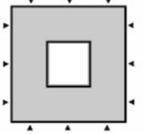
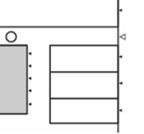
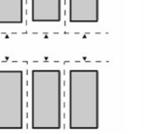
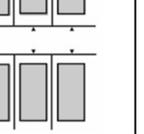
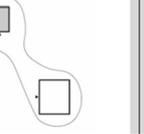
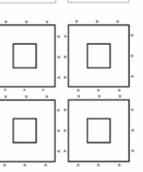
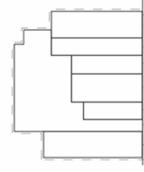
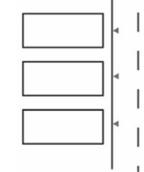
安田登氏の著書「日本人の身体」ではこういった「会う・合うための空間」を「あわいの空間」と定義している。この空間を踏まえたうえで住宅の変遷を見ると、時代により変わってきた「家」の定義で特に重要だったのは、井戸端や縁側、道といった「同じ場」や井戸等「同じもの」を「共有すること」であったと考えられる。

現代において、「あわいの空間」は家から離れ、公園や飲食店といった場所に変化している上、隣近所にいる住人と話をすることはとても少なくなった。しかし、核家族化・共働きの一般化・独居老人等と、血縁・婚姻によるつながりなどが薄れていく中、隣近所の人との関係性は今後一層重要視されていくものと思われる。そうした際、「あわいの空間」は重要なものとなるのではないだろうか。

2.4. まちの変遷

「あわいの空間」が外部に多く存在していたことからわかるように、戦前までは生活の中心が外・道に存在していた。都市の形態も道を中心として分けられ、まちの単位も道を中心に分けられていた。それが変わってしまったのは1960年代に施行された道路交通法が大きな要因である。この法律が施行されたため、それまで続いていた「生活の中心・人のもの」であった道が「自動車のもの」に変わってしまった。道が生活の場ではなく、立ち止まれない、歩くだけのものになり、結果、都市が現在の形に変わった。

表1 住まいとまちの変遷

	室町時代あたり	江戸時代あたり	明治・大正時代	戦後～現在	西大井に住む人	設計案
家とは	一つの囲いの中 	一つの通り（裏路地） 	一つの建物（未完） 	一つの建物 	家とカンタキ 	
一体感	場の共有・軒/屋根の共有	モノ/場の共有・相互扶助	血縁による繋がり（未完）	血縁による繋がり	場/時間の共有 このまちで育ったというアイデンティティ	
人の出入り	イエを通過して、隣のまちへ行ける・開放的	裏路地に入るまでに門番がいた・赤の他人は入れない	「使用人」の出入りがあった・冠婚葬祭の際、人の出入りがあった	血縁外/婚姻外の人には招かれないと入れない・とても閉鎖的	利用者は自由・（地域の人であれば出入りする）	
なぜそうした？ どうなった？	裏が町人の日常の場になった・裏の町とも強いつながりをもった・道が中心になった	裏長屋の借家人同士で相互扶助があった・色々なものを分け合った・道が中心になった	西洋文化の流入・貞操概念の変化・一住まい一家族となった	プライバシー意識が高くなった・隣人でも付き合いはほぼなくなった	地域で高齢者を介護する・（子供たちが立ち寄れる場になった）	
都市の形態	四面町 	両側町(昭和初期まで) 		現在の郊外住宅 		

2.5. まちの再考

現在のまちは、多くの場合道を境目に住居表示により振り分けられ、公共的・福祉的な施設はその住居表示を元に配置場所を決められている。しかし、この場合だと自身になじみがない場所にある施設であっても「地元にある施設」として受け入れなければならないという問題点があると感じる。特に福祉施設においては車で移動しなければならない程離れていたとしても「地域にある施設」とされ、あまり馴染みがない土地であってもそこに運ばれてしまう。だが、実際には幅員の広い（2車線以上の）道路や交通量が多い道路、中心となる場などが影響することでより小さなまちのまとまりが存在しているのではないかと考える。

設計を進めるにあたって、この小さなまとまりを現地調査から探すこととし、それを元に施設同士の距離感・設置場所を探っていく。

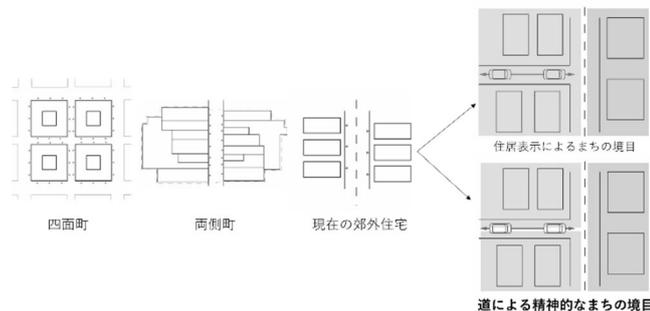


図1 小さなまちのまとまり

2.6. まちに根差す施設

福祉介護施設においては、その施設を中心にして地域にいる利用者を一か所に集める。だが、年々「自宅で介護を受ける」というニーズが高まっている中、地域密着型の福祉介護サービスが必要とされている。しかし地域密着型サービスというまちに根差すような機能を持っていたとしても、その拠点となる施設が同心円的な広がりしか持たなければ、これまでと同じ外に対して閉じた空間しか生まれないのではないだろうか。そうではなく、地域を横断するような、「まちに住む」ことを後押しするような施設やつながり、サービスが必要なのではないか。次章では地域密着型のサービスがどういったものなのかをまとめる。

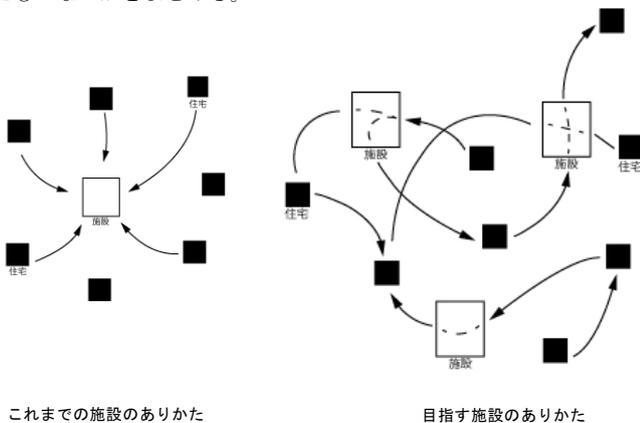


図2 目指す施設のありかた

3. ショウタキ・カンタキ

ショウタキとは「小規模多機能型居宅介護」、カンタキとは「看護小規模多機能型居宅介護」の略称である。これまでは「通所・訪問・泊まり」それぞれの

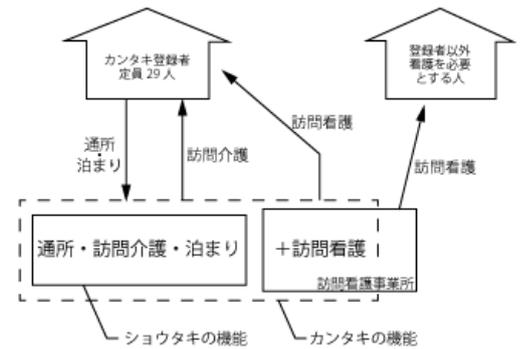


図3 カンタキについて

機能別に施設も職員も分かれていたが、この施設の場合は一つの施設・同じ職員にこれら3つのサービス（カンタキの場合は看護も加わる）を担当してもらうことが可能になる。また、急な泊りにも対応することが可能であり、「地域で最期を迎えたい」という高齢者の思い、「地域密着型サービス」を支えるものとなっている。

3.1. 事例調査

3.1.1. 「幼・老・食の堂」について

「地域密着型サービス」の事例として、「幼・老・食の堂」をあげる。当施設は設計にあたって全体計画や地域とのつながりにおけるダイアグラムを始めとしたデータが一からまとめられているという点でとても貴重な事例となっている。本計画を進めるにあたり、全体計画・地域とのつながり・平面図・現地調査・ヒアリングといった各面からの分析を行うことで、「地域における介護施設」に必要とされることなどを調査していく。

3.1.2. 「幼・老・食の堂」の概要

「幼・老・食の堂」は看護小規模多機能型居宅介護施設（カンタキ）として建てられた。株式会社ケアメイトが経営を行っており、「けめともの家 西大井」と呼ばれている。一つの施設に保育所と高齢者施設の機能が配置されており、訪問介護を行うケアマネージャーの拠点にもなっている。



図4 幼・老・食の堂

<https://www.esna.co.jp/works/10728/>「株式会社辰 221-2 けめともの家・西大井（「幼・老・食の堂」）」より

設計は teco が行い、品川区西大井の住宅密集地にある。

3_1_3. 全体計画について

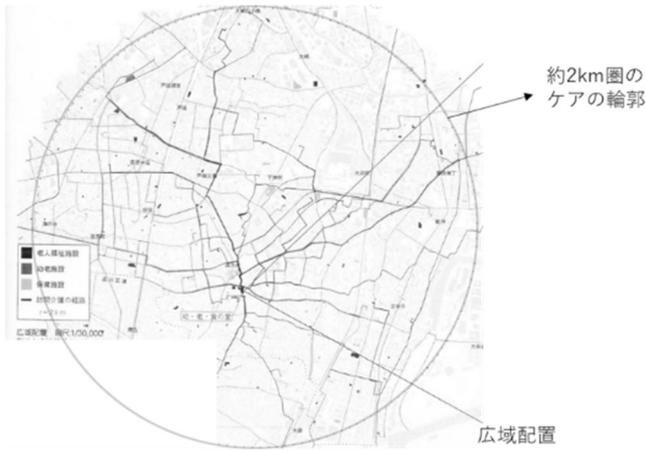


図5 幼・老・食の堂 都市スケールの計画
「SD2016」より

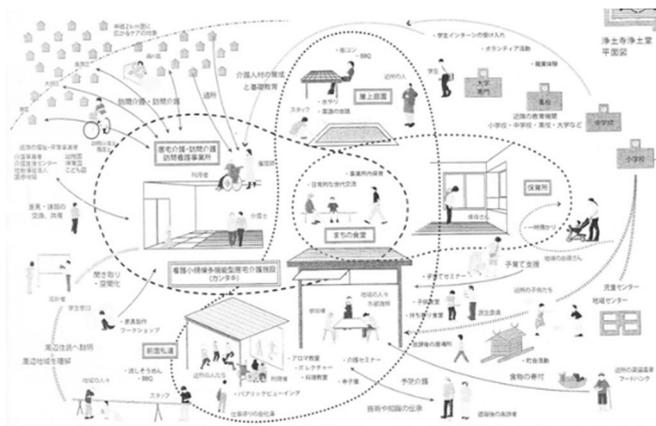


図6 幼・老・食の堂 地域とのつながりについて
「SD2016」より

設計に際し、マクロ視点からの設計も行っている。敷地周辺のみでなく、都市スケールから一つの事業所が地域に作る約2km圏のケアの輪郭の可視化をしたのだ。また、幼・老・食の堂にある「まちな食堂」を中心に、様々な地域資源を発掘・連関させることも計画していた。

3_1_4. 平面図



図7 幼・老・食の堂 平面図
「新建築 2019年2月号」より

斜線部分が福祉機能を持った範囲、ドット部分が保育所となっている。1階平面図にある矢印は「お堂」的空間となっており、中心/

回遊/開放という空間特性を持っている。

通りに面したファサードは地域に対して物理的・精神的に開いており、内側に閉じず、地域に開くことを大切にしていることがわかる。

3_1_5. ヒアリング

今回の研究に即し、代表取締役の板井佑介氏と、『けめともの家 西大井』のホーム長の竹内留美子氏にヒアリングを行った。その中で特に印象的であったお話があった。

・介護保険を利用する人はどうしようもなくなってからくる人が多い（竹内氏）

→家族で介護の問題を抱え込んでしまうことが多い

→介護を受ける本人の意思とは別のところで意思決定がなされることが多い

・施設利用者の友人が施設に遊びに来ることもある（板井氏）

→お茶飲み仲間を訪ねて施設に来る人もいる

→目指すのは元気なうちから施設に遊びに来て、その延長で利用者となること。

・様々な機会を制限しているのは施設側（板井氏）

→安心・安全は突き詰めると「(利用者が身体的に)安全であれば、(スタッフ側が)安心」ということで、この二つは必ずしも比例するわけではない

・「機会」をつくることが重要であると思う（板井氏）

→「見る機会」があるからこそ「考える機会」がある

→幼と老が隣接しているのは、「見る機会」を積極的に設けるといふ裏テーマがある。

以上のことから、第一に「どういったことが起こっているのか」

「自身がその立場になった時、どうなるのか」ということを知る「機会」が足りていないと感じた。

3_1_6. 現地調査・視察



図8 幼・老・食の堂 施設内の様子

施設内を見せていただくと、「街並みとの連続性」「施設内への入りやすさ」「自宅で過ごすような日常感」がとても印象的であると感じた。なぜかという、「幼・老・食の堂」の設計において住宅が持つベランダや掃き出し窓、駐車スペースのためにセットバックする

建築といった要素が使われているからである。また、通りに対して壁面がセットバックしているため、圧迫感を感じなかったのも大きいと感じた。

出入口は複数用意され、事務所へ行くには階段を用いて3階へ直接アクセスできるうえ、2階にも入ることができるため、「建物に入る」というハードルはとても低かった。

3.2. 「機会」をつくる

今まちにある多くの施設は利用者を無意識にでも制限し、特定の属性を持つ人を自然とカテゴリ化する。しかし、それはまちや自分自身に潜む様々な問題に気づく機会を取り上げていることでもある。

自分が住むまちにどういった人が住んでいるのか、どんな問題が実際にあるのかなど、普段あまり考えないような、見えにくい問題を「自分ごと」として考える「機会」を設けるためにも、一つの敷地に複数の機能を入れて一つでも多くの属性を持った人が一所に集まる・すれ違う「機会」を設ける。

4. まちの分析

4.1. 調査範囲

設計にあたり、雑司ヶ谷1〜3丁目・南池袋2丁目を中心としたまちを対象地域として、実際に歩いた上でまちに住む人にとってのちいさなまとりや中心となるものがどういったものになるのかを調査する。

4.2. 現地調査

実際に歩いてみると、高低差がまちのまとりに影響してくることが分かった。また、古くからあるまちということで、戦後開発された町とは違い多種多様な道が存在している。

この現地調査をもとに、いくつか見つけた対象地の中で、弦巻通に面する一区画を中心に設計を進める。

4.3. 幅員とにぎわいの関係について

「にぎわい」を、道路上から見られる・聞ける・感じ取れる「+αの要素」としたとき、現地調査から幅員と「にぎわい」には以下のような関係性があるということが分かった。

特徴的であったのは「人の営みから感じるようにぎわい」と「道で遊ぶ児童から感じるようにぎわい」は両立せず、幅員や交通量の差により変化するという点だ。各分類・特徴についてまとめる。

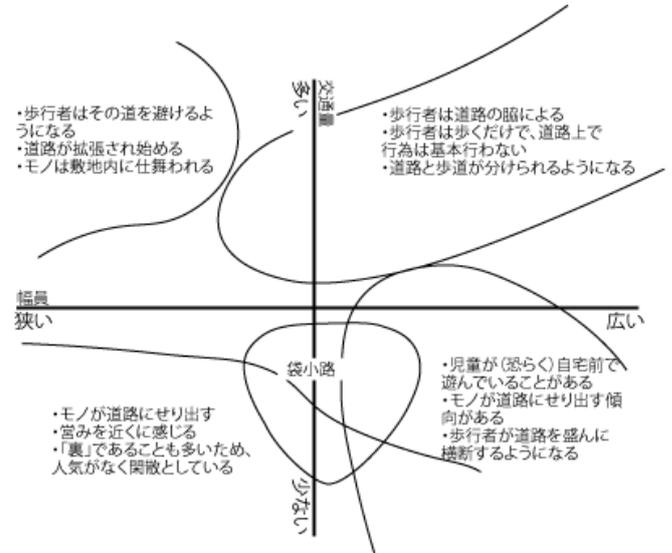


図9 幅員とにぎわいの関係について



図10 雑司ヶ谷を中心とした地域

4.4. 道に対する開き方の分類

前節で述べたように、各道のパターンごとに提案を行う。各種類は次の4種類である。「袋小路」「路地」「交通量が少ない・自動車がスピードを落とす道」「交通量が多い幅員が広い道」「交通量が多い幅員が狭い道」以上5種類である。以下は各道の分類ごとに、幅員と賑わいの関係を、破線で示したものである。

4.4.1. 袋小路

袋小路は通り抜けができないということもあり、赤の他人が道の奥に入るのを自然とためらう。また、交通量も限りなく少ないため、袋小路内で遊ぶ場面が多くみられる。

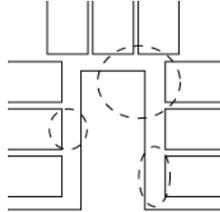


図 11 袋小路

4.4.2. 路地

路地は人（・自転車）がやっと通れる幅員であることから、比較的道上にモノがはみ出る傾向にある。はみ出方はさまざまであるが、完全にふさぐことはない。

人の営みを近くに感じるのはこのみちが一番大きい。

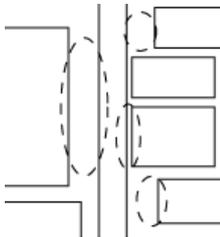


図 12 路地

4.4.3. 交通量が少ない・自動車の速度が遅い道

交通量が少ない道・曲がりくねった道・大通りから離れた道は、交通量が少なくなる・運転速度が比較的遅くなる傾向がある。

児童が道路上で遊んでいることが多いのはこのパターンの道となっている。

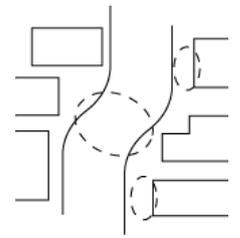


図 13 交通量が少ない、速度の遅い道

4.4.4. 交通量が多い、幅員が狭い道

歩道が分けられていないが交通量が多い道路においては人通りがあまりなく、歩いている人は道の端を歩いている場合が多い。一番交通事故の危険性が高い。

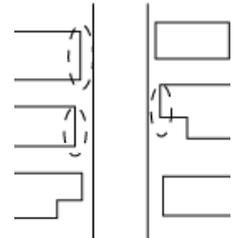


図 14 交通量が多い幅員の狭い道

4.4.5. 交通量が多く、幅員も広い道

道路の幅員が十分に設けられている場合、歩道と車道が明確に分けられていることが多い。建物は敷地いっぱいに建てられていることが多く、ビルが建てられていることが多い。

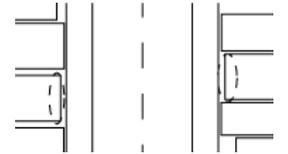


図 14 交通量が多い幅員の広い道

5. 地域計画について

5.1. 目指すまちの全体像

地域調査から、後期高齢者でも手足に障害がない場合であれば

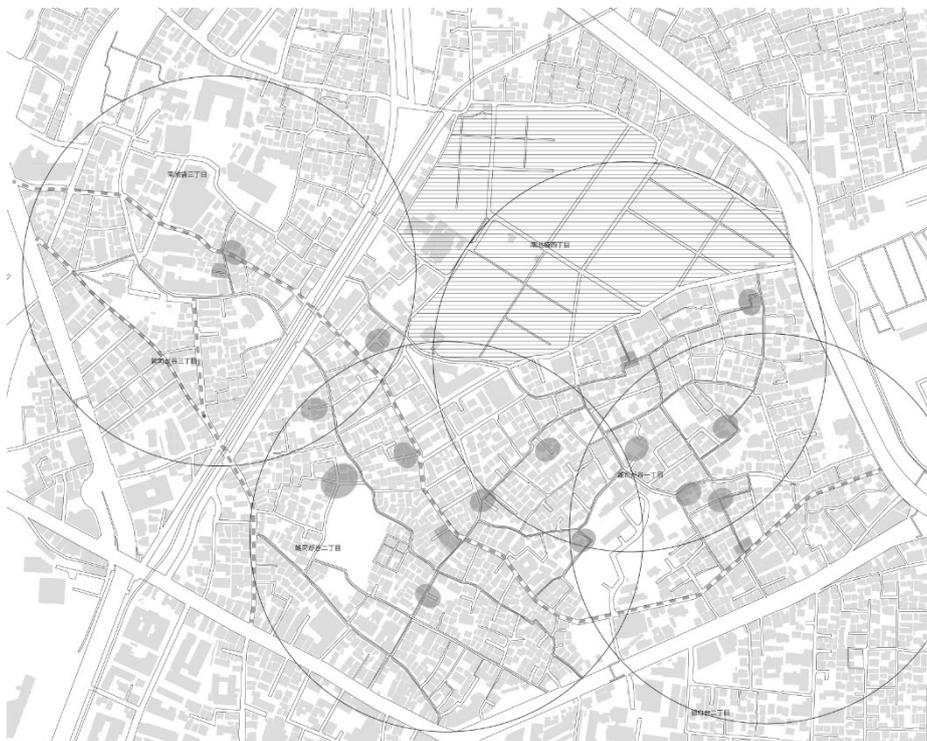


図 15 目指す地域像

自力で歩けるだろう半径 250m (徒歩 10 分程度) の円を基準として、地形による高低差でも細かなまちのまとまりは分かれるとして、最終的に 4 つの円が存在していると考えた。

各円の中心となる敷地に、周辺の情報を取り込んだ地域密着型介護サービス機能を持つ施設があり、各施設を繋ぐように縦横無尽に新しい「通り」が繋がっていく地域を目指す。この際、核となる施設をもとに地域にある空き家や空き室を持つ住戸等で「家開き」が行われるようになり、町全体が一つとなることを最終目標とする。

5.2. 「あわいの空間」の設計手法

第 2 章でふれたように、かつてのまちでは、コミュニケーションの場が重視されていた。そして、現在のまちにはそうした場が必要ではないかと考える。そのためには、利用者と利用者以外を無意識に分けてしまっている現在の施設や、必要以上に閉鎖的な今の家の在り方を変えることが必要である。

本設計では、道に対する開き方と同時に、「あわいの空間」という「会う(合う)ための空間」を用いて、施設とまち、利用者と非利用者といった分断されている者同士を近づけることを目指す。また、中心となる施設の提案と同時に、第 4 章で分析した各道の種類ごとにどういった形であれば家の一部でも開くことができるのかを、以下の手法でもって提案することを目指す。

以下の図では、破線をそこで生まれる「にぎわい・営み」として、各道の開き方をまとめた。

5.2.1. 袋小路

向かい合わせの住宅が道に対して開くことで、道全体が「あわいの空間」となる。

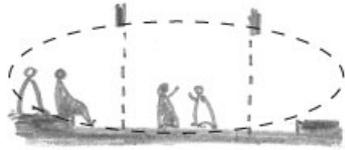


図 16 袋小路

5.2.2. 路地

道に迫った住宅に対する提案。カーテン等視線を遮るものを外壁の境界から離れた位置に新しく設置することで、住宅を完全に閉じたものにはしないようになる。



図 17 路地

5.2.3. 交通量が少ない、自動車がスピードを落とす道

道と住宅との間にベンチ等の「あわいの空間」を新しく設けることで、道全体を人のものとし、車がより速度を落とすような空間を作る。



図 18 交通量が少ない、速度の遅い道

5.2.4. 交通量が多い、幅員が狭い道

塀をなくし、道に対して住宅の一部をセットバックすることで歩行者を守ると同時に、「あわいの空間」を生み出す。



図 11 交通量が多い、幅員の狭い道

5.2.5. 交通量が多い、幅員の広い道

土間的空間といった、内側に土足で入ることができるような空間を作ること、人を内に招くことが可能な「あわいの空間」を作る。

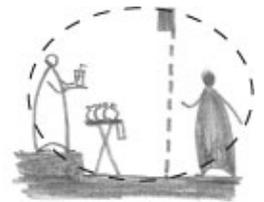


図 11 交通量が多い幅員の広い道

5.3. 機能について

地域密着型介護サービス機能(ショウタキ・カンタキ)を中心とする。しかし、一つの機能のみに特化してしまうと対象者・利用者以外を排除してしまう可能性があるため、いくつかの機能を重ね合わせる。「まちに対して開いていること」は必須条件であるため、地域交流スペースは必ず設けることとする。

5.5. 敷地について

施設を設計するのは、弦巻通りに面した位置にある敷地にする。交通量の少ない、比較的幅員の狭い道路を挟んだ向かい側には「都電テーブル」「食料品店」が存在する。

反対側は袋小路に面しており、袋小路のさらに奥には「雑二ストア」と呼ばれる人だけが通れる幅の商店街が存在している。



図 16 設計を行う敷地について

6. おわりに

現代の日本では育児や介護はその家族が負担することが当たり前であるが、過去に遡ると必ずしもそうでないことがわかる。その違いを生み出した要因の一つには「住まい」があることは明白だ。

本研究では分析・調査を通して分かった「家の定義の基準」「幅員とにぎわい・営みの関係」「人と会う（合う）、あわいの空間」等を用いて「まちに住む」きっかけを提案していく。

提案を通して、施設や家開きにより生まれる「あわいの空間」、道を住人間で「共有」し、点と点が線に、線と線が面になるようにまち全体がまるで一つの家のような空間になることを期待する。

参考文献

- 1)織山和久、『自滅する大都市 制度を紐解き解法を示す』2021
- 2)吉田伸之、『伝統都市・江戸』、2012
- 3)横井清、『中世民衆の生活文化』、1975
- 4)中野隆生、『都市空間と民衆 日本とフランス』、2006
- 5)戸田芳実、『中世の生活空間』、1993
- 6)『SD2016』、鹿島出版、2016
- 7)『SD2018』、鹿島出版、2018
- 8)『新建築 2019年2月号』、新建築社、2019
- 9)安田登、『日本人の身体』2014
- 10)<https://fukushi-job.jp/lab/archives/12116>(2021.10.12)
- 11)<https://job-medley.com/tips/detail/926/>(2021.10.12)
- 12)<https://teco.studio/care-hall-for-child-elderly-and-dining>(2021.10.13)